螢雪餘聞 第一六

15
1560
15

蛍雪餘聞

門 イ 5
號 1560
巻 15

昭和 年 月 日
寄贈 氏

37 5548

598

早稲田大學圖書

螢雪餘聞

第十六

中組
凸版

昭和　年　月　日
氏寄贈

599

第十六 目次

一 緒言
一 鷹匠ノ事並鷹匠蕎麥ノ事
一 房州鋸山ノ事
一 高野豆腐
一 蜀山人小話
一 季鷹ノ歌
一 伊勢茶商ノ事
一 雨乞ノ事
一 西洋櫻實
一 ド、一三章
一 和歌、狂歌
一 蘇格蘭人ノ衣服音樂
一 發句二章
一 倫敦所聞二件
一 蘇山記勝

嗚雪余聞 第十六

緒言

余謨話ヲ好ミ酒席茶讌ヲ論セス人ノ集テ話ス
スヲ聴ケハ其言ノ議論メキタルト諧謔ナル
トヲ論セス更ノ聞ケルヲ寛ヘ又位ナリ人モ
亦小生カ話ヲ好ムカ故ニ話スニハ非サルモ
ニ人或ハ三人ト相集レハ必ス未タ耳ニセヌ
コトナキモノモ世ニコレ所謂三人行ケハ我師
アリトヰフノ意ナランカコレヲ聞テモ其
時限リトシテ打捨テオクハ皆直ニ忘レルモノ
ナレハ聞クニ随ヒ之ヲ記シ置テ他日雨窓独
坐ノ徒然ヲ慰ムルノ用ニ供セントス
レヤ一労ハシキワザナレハ一タビニ二十
ルレハ又友朋ノ労トモ思ヌル望ムヘシコ
ニ其頃汝ヲシルスコト右ノ如シ

篠騒子誌

舊匠ノコト 並夜鷹蕎麥ノコト

昔シヨリ鷹狩ノコトハ古史等ニモミヘオレヲ掌
ルノ官職サヘモアリシ位ニテ徳川政府ノ於ニ

ナリテモ鷹匠ハ中々重ンセラレシモノナリト
カ 鷹匠カ鷹ヲ馴スニハ永クモ両三年ニ之
ヲ放チヤラス也人ニ馴レ慣テ忘リ又物ノ用ニ立
タヌ了トナル 故ニ両三年飼養シテハ放チ又
荒鷹ヲ捕ヘテ馴スモノ也ト云フ 殊ニ佳キハ毎
年ニ換ヘスシハ役セヌト云フ 扱其馴シ方ハ
荒鷹ヲ暗室ニ繋キ食物ヲ前ニ置キテ数日間置
クコナリト 然ルニ鷹ハ四五日ノ間ハ決シテ食
セス後ニ飢ヲ覚ルニ至テ力尽テ食餌ニ嘴ヲ加
フルモ 此時ニソ既ニ馴スヘキ時ノ来リシナリ
テ其レヨリ時々ニ食餌ヲ与ヘテ歓心ヲ買ヒ漸
次ニ馴ルヽニ随ヒ後ニハ手甲ニ載セテ深夜ニ
彼処此処ト散歩スル也 斯ク馴シ時ハ実ニヨ
ク他鳥ヲ捕ヘ遊猟ノ助ケヲ為ス時ナリ サテ
鳥心ニモ恩ヲ思フト云フモノカ年限タチテ放
タレシ時モ後数日ハ常ニ飼ハレシ鷹匠ノ家ノ
屋根ニ来テ去ラス 鷹匠モ今日迄飼ヒシ鳥ノ
了ナレハ此情ヲ乞フカ如キ声ヲ聞トキハ我子
ヲ失フ如キ心地スルト云フ サレハ其念ヲ断
チ心強クモ之ニ拘ハラスオル時ハ彼モ詮方ナ

銀座 伊東屋製

サレド飛去テ又来ラズ　ナレドモ又翌年ニ至リ同ジ鷹ノ再ビ手ニ入ルコトアリ　此時已ニ一年以上モ経シコトナレバ又全クノ荒鷹トナリ果テ、又前ノ手続ナクテハ馴スコト能ハズトノコトナリ

而又鷹匠ガ毎夜鷹ヲスヘテ散歩スル中深夜空腹ヲ覚フル時食フモノナシトテ或ル蕎麦屋ガ鷹匠ニハ無銭ニテ食ハセルニ付夜業ヲ許サレタシト乞ヒ其許可ヲ得テ鍋焼蕎麦ヲ夜中売歩ルヤシヨリ夜鷹蕎麦ノ名ヲ受ケシナリト云フ（大久保翁談）

房州鋸山ノコト

鋸山ハ芝浦辺ヨリモ晴天ニハ望ムヘキ山ナルガ中々面白キ処ニテ今日鉄道ノ便開ケタレバ追々遊フ人モ出来ルヘシ　同山ニハ猿ノ多キコト比類ナク コレニテモ一ノ見物ナリ　又同山ニハ「マンリヨウ」ノ木多ク一般ニハ二三寸ノ小木ヨリ見ルナキ程ナルニ同山ニ至レバ其周囲一人ニテハ抱キ兼ヌル位ノ大木アリト云フ

又房州ノ近海ニ日蓮宗ノ盛ナル処アリ 伝

カ日蓮上人ノ由緒ニ依テ同所ニテ鯛ヲ漁スル事厳禁ナリ去故カ其辺ニハ鯛ノ多キ事ハ他ニ比類ナク此習慣今日ニ存シテ居レハ土地ニ高貴ノ来宮アレハ其鯛ノ群集スルヲ示スト云フ中ニハ三尺余モアル鯛カ小魚ヲマタハ之ニ筆ヲ様ハ之ヲ小ニメハ泉水ノ錦魚カ餌ヲ争フニ同シク之レ又同所ニ遊ハンモノ目ニハ必ス一見ノ価アルモノナリ（不許転載）

高野豆腐

今ヲ距ル事四百年前紀州高野山ニテ名寺院ヨリ上納セル大豆ヲ以テ製造ヲ初メタルモノカ年々盛大ニナリ遂ニ高野豆腐ノ名ヲウルニ至レリ

（時事新報明治廿一年二月上旬ノ記）

蜀山人ノ話

蜀山人ノ洒落ナル事ハ世ニ聞フル処ナルカ或年ノ初メ常ニ出入セシ旗本ノ家ニ年礼ニ赴キシカ其家ノ家来山水ノ屏風ヲ見ルヨリ戯レテ

ノ使見て之国しやうなるもの識

5

ト云ヘ此ニ三山人取敢ズ
さきまのはのま歳在へぬらん
ト答ヘシニ其若山人ノ即妙ニ嘆服セシトゾ（石
徳叙ニ）

李鷹歌

李鷹一日田舎アルキセシ折シモ狂歌ノ流行
セシ比ナリシカバ若ヨリ集ヒ先生ハ京師ノ
御方ナレバ狂歌モ巧者ナルベシ是非ニト迫
ラレシカバ
めづらしいなみの辺ので御座りま京おく
とこふてくれるな
ト付テ唱来ヲ王ニトゾ（宮崎道三郎）

伊勢茶商ノ了

伊勢ニ中茶上云茶商アリテ其番頭某ハ支理ニ
通センセノニテ風ニ海外貿易ノ利ヲ諭シ横浜
開港ノ頃ヨリ茶ヲ送リ出シ通商ヲ営ミシヨリ
当時世間ニ横行セシ志士ノ忌ム所トナリ志
士ノ其ヲ刺サレトメ乱入セシモ数回ナリシモ

銀座 伊東屋製

6

某ハ頑強クモ常ニ其町ニ家ニ居ラス又免レタリ一日某ハ其志士ノ往タルヿヲ知リシヨリ故ラニ之ヲ招ク志士モ之ニ應シ又行キシニ某ハ驚カス志士ニ向ヒテ云フ先生未タ諸君来臨ノ中ニ在セルヿナシ誠ニ遺憾ナリ併シ諸君カ数多ノ来臨アリシ縁由ハ先生ヨク之ヲ知ル先生ハ命ヲ惜テカク云フニ非ス愚意ノアル所ヲ諸君ニ告ケ猶諸君ノ意ヲ満ス能ハスニハ甘ンシテ諸君ノ刃ニ伏セシコトヲ欲スルセ先生カ外交ヲ主張スルハ今ノ事ニ非ス今日鎖港攘夷ヲ実行スルハ国ヲ疲ラスノ基ニ又彼ヲシテヤマスノ効ハアラサルヲ知レハナリ故ニ寧ロ彼ト通商シ彼ノ好ム所ノ茶ノ如キヲ売リ其代償ハ即チ入テ國益ヲナスノ具トナル又特ニ茶ノ如キハ元ヨリ贅沢品ナリ之レナクモ人ヲ飢サシムルニ足ラス之ヲ海外ニ出セハトテ我モノ供給ニ事欠カスカクシハ茶ノ貿易ノ如キハ一挙両益ニ又レカモ国ヲ富ラスノ害ナシ今彼ニ敵セニカ日本刀ノ鋭利モ彼ノ砲丸ニ敵セス敵ス可ラストスト知リテ敵

7

シ自斃ヲ招クハ愚也　コレ書生ナ貿易ヲ行フ
ノ所以ナリ　諸君ニシテ猶ニヲ信セスハ殺シ玉
ヘト述フ　志士之ニ服シ其非ヲ悟テ某ト交ヲ
結フニ至レリ　後某ハ信実ヲ旨トシ売ルニ偽
物ヲ以テセス　為ニ外商ノ信用ヲ得タリ　一
夜外商ヨリ金巾ノ見本ヲ取寄セ其中ヨリ択ヒテ
注文セシニソレヨリ劣等ノ品ヲ送リシカハ彼
ハ怒テ横浜ニ布告シテ何某商会ハ是ノ不信切
ニナセリト云フ　数某商会ニナシ直切ニ其不
正ヲ詰リシカハ夫ヨリ外商モ此ノ如キ所行ヲ
止メタリト云フ（宮崎道三郎）

雨乞ノ事

百姓ノ水利ニ争フ事ハ屡ハアル事ニシテ又水利
ノ都会ニヨリ得失ノ関係モ大ナルモノナレハ
此争モ亦止ヲ得サルニ出ル也　狡猾ナルモノ
ハ夜中ニ他田ノ水ヲ竊ニ我田ニ引クカ如キ事
アレハ夜番ヲ設ケ之ヲ守リ此等ヘモ咎トメハ殺
傷サレ杯シテ両村ノ争闘トナル事モ往々アリ
故ニ少シク降雨ノ乏シキ年ハ屡此騒動アレハ

当路者ノ能ク種々ニ之ヲ穏ニ済セルノ工夫ナキセシ処ナリ　他所ハ知ラズ肥後杯ニ於テハ旱天ノ打続ク時ハ其筋ヨリ雨乞ヲ命セタリ　雨乞ニ於テハ各村共団メ祭ヲナスモノナレハ此度ノ結ル回ハ百姓共決メ争フ事ヲ為サス　実録会ナリ其準備ニ奔走セル也　カリスル内ニハ雨ノ降ルアレハコレニテ百姓ハ雨乞ノ効アリシトシ争モナク相和メ農事ヲ取ル也　元ヨリ此争ヤヨシ起ル也　争ノ中ニ降雨スル事アレハ今ニテ相敵視セシモノモ顔ヲ和ゲテ相和スル也

此ノ如クナルヲ以テ一回ノ雨乞ニメ降雨セスハ又争ノ起ル事ナキヲ保セサルハ折ヲ見計ヲヒ多キハ一年ニ両三度モ雨乞ヲ行フ事アリ　故ニ雨乞ナル想ノ一トメ擯斥スル人アルハ其雨乞ノ施政ノ一方界タルヲ知ラサルニヨルナリ（平島及平　肥後）

西洋櫻実

日本ノ櫻ハ花ノ美ナルニ似ス甚実ノ食スルニ堪ヘス　之ニ反メ西洋ノ櫻ハ花ハ貴ニ見ルニ足ラ

銀座　伊東屋製　No. 74　10×20

き

9

サルモ一ツ一ツヲサル好味ノ実ヲ結フ　元ヨリ
甚種ヲ異ニスルニアレ西洋ノ櫻花モ幾分
カ我山桜ニ似タル所アリ　花ハ鞍伯高崎正
風男カ洋行ノ折ニヨミテ
今年こそは実蒔拾はんと思ひしやまの日比谷
の山桜花
ト詠セシハイト面白シ（西園寺侯望侯）

三章

唯一の兄てさくなよい梅つはめかよふそむり
いなり
のおえ北ルと人桜らじうゑを難波のお
時雨
世間恋らの鶯とめて花の木陰をひらなくむめ

隠海路恋　鴨長明　上
思ひはまりうちぬる宵のまほろし波路を分
て行ふまひ参り
舟のりて山のゆほる　はる人

No. 74　10×20
銀座 伊東屋製

田子の浦なみ間る富士のあけ見へて

空即是色　一休禅師

白露のおのがすがたは無まゝに紅葉におけハ
くれなゐの玉

色即是空　同

花を見よ色香ルと（も）散はてゝ心なくてぞ春
は来つそり

同

なしとりハなしとや人の思ふらんこたへし
そよする山彦の声

ありとりハありとや人の思ふらん呼へて
ルなき山彦の声

同

雨あられ雪や氷りとへだつれど落くれバおな
じ谷川の水

同

ほらぬ井にたまらぬ水の波たちてかけル形ル
なき人ぞくむ

一行空アケ

のりの世にあだなる露の身をおちて千歳をい
はふ人のはかなさ

讃人しらず

いつるとはいるとは月をおしはねば心のい
る山のはもなし

今
弘法大師

今ははや後世のつとめもせざりけりあらんの
二字のはるにまかせて

慈鎮和尚

ありのよの又旅寝してくさまくらゆめの世に
また夢を見るかな
引よせてむすべば草のいほりにてとくればもと
の野原なりけり

狂歌三首

一休禅師

作りおく罪の志ゆみほどあるならばゑんまの
帳につく所なし
釈迦といふいたづら者が世にいでて多くの人
をまよはする哉

うそをつき地獄に落るこのたらいはなきすはしく
る秋近い、ありません

徳川慶喜

吹きとし堤の風は見えねど此柳をはなれて青
柳の糸

蘇格蘭人ノ衣服

蘇モニ遊ビテ先ヅ我眼ヲ遮ルモノハ蘇人ノ衣服也 上ニハ通常ノ服ヲ着シ腰ヨリ下ハ膝ニ達スル袴ヲ穿ク膝ヨリアラワシ其下ハ脚胖ヲハク 其ノ前ニハ巾着ノ如キモノヲ下ケ巾着ノ中央ニハ小刀或ハ房ヲ二本下ケタリ 巾着ハ之ヨリ獣皮ヲ以テセルト綿布ヲ以テセルトアリ コレ何為ニ下ケルカ知ラヌカ実ニ人ヲシテ異様ニ感セシムル也 又袴ノ縞柄色合ニ夫々定リアリテ其姓ノ者ハ何縞何色ヲ着スト云フ如キ事ニテ其地ノ人ニハ一見シテ彼ハ何姓ノ人也ト云フ事ヲ知ルト云フ 今ハ最モ之ヲ着スル者甚タ多カラス 市上ニテモ稀ニ見ル位也

唯同地ノ兵士ハ依然トシテ之ヲ着ケ居レリ
又「バグパイプ」ナル笛アリテコレハ蘇国固有ノ
楽器也ト云 其製ハ余之ヲ手ニセザレハ知ル
能ハズト雖モ笛ノ如キモノ数本アリテ之ト吹
キノ口ニ接スル処ノ周ニハ一ノ袋アリ吹手ハ
其袋ニ息ヲタクワヘ置テ笛ノ穴ヲ手ニテ開閉
シ自由ノ音ヲ発スルモノト思ハレタリ 其音
ハ寧ロ売飴者ノ笛ノ如シトモ云フヘキモ余リ高
雅トハ評シ難シ 蘇国ノ名族アリシ公ノ夫
人ハダンケルドおナル其別墅ニ住スル事ナル
カ其園
園中ノ広キ周囲五英里ニワタリ園中ニア
リ河アリ飛瀑アリ是皆人工ノモノナラズ
メ其中ニ一茅屋ヲ見ル 余等ニ謂テ曰ク コレ園丁
ノ家ナラント 而シテ之ヲ聞ケハコレアリール
女公ノ住居ニシテ室ニ余等ヲシテ其椅ニ憩カシメ
タリ 其家ノ前ニ蘇土服ヲ着シタル一人アリ
テ彼「バグパイプ」ヲ吹クヲ見ル コレ女公カ朝
食ノ時ニソノ女公カ毎朝之ヲ聞クヲ常トスル也
ト 余等恰モ其時ニ際シタルカ又市上ニ聞ク

トハ異ニシテ満山ノ緑樹モ秋ニ遇フテ悟ニ黄落セントシ下ニ瀧流ルヽ清泉ハ俗腸ヲ一洗スルノ價アリ此好景ヲ目ニシ彼笛ヲ聞クニ又其音ノ更ニ厭ハシキヲ覚ヘサリシ其後到ル処ニ之ヲ聞キシカ嘗テグラスゴー博覧会デ同国古有ノ舞踊ヲ見タリコレ尤モ彼笛声ニ応シ踊ルモノナルカ唯足ノハコビノ自由ナルハ又コレ上ノ舞者ニモ劣ラサルヘシ僕ニ其味ハ寧ロ古風セト云フノ点ニアリテ技術ノ巧ヨリ見レハ別ニ絶妙ノ技モ思ハレサルナリ

蘇国ノ景ハウヲルタ、スコット氏ノ筆ニ登ルア多ク又之ヲ目撃スルモ頗ル面白ク感シタリ

発句二章

はや釣や水村山郭酒旗の風　嵐雪

雁の腹見送る空や舟の月　其角

倫敦所聞二件

ホーム、ファドブグスト云フモノアリコレハ

畜主ノ知レヌ犬ヲ養ヒ置ク所ニ又小屋ニ何年何月何処ニテ之ヲ見出セリト記シ置キ其持主ノ来ルヲ待ツヿ廿日併シ一年ノ後ニ主人知レサル時ハ之ヲ銃殺スルセト中ニハ遠行スルノ有擁フルヿヲ厭ヒテワサト之ヲ放ツモノアリ此ノ如キハ到底其主人ニ知ルル能ハサル也

ピカヂリーハ倫敦市街中富貴十九人ノ住スル所ナリ故ニ此近傍ニ魚業ヲ営ムモノゝ如キハ大ニ利潤アリ夫ニ付テ此等ノ富者ハ鮮魚ヨリ食ハサレハ前日ノ魚杯ヲ持行ハ忽チ出入ニ関スル位ナレハ八時近待テ之ニ売残リシ魚ハ畜ヘ置カス又半價ヲ以テ売ル也故ニ八時過キ同所ノ魚店ヲ過キレハ店前ニ人山ノ如シ之レハ時ヨリ鮮魚抔ハ半價ニテ得ラルレハナリ

蘇山記勝

明治二十一年夏期ノ休課ハ英古ニ日月ヲ消セントニト決シ在ヲ発シ倫敦ニ向フ同府ノ丁ハ既ニ前年ノ記ニ其大略ヲ述ヘタレハ同府ノ丁

銀座 伊東屋製 No. 74 10×20

ニ就テハ殊更ニ記セス　唯同存ヨリ分セル旅行ニハ毎次其記ヲ草スルアラント欲ス　余蘇松蘭ニ遊フノ意アリ　然レ圧固ヨリ同地ノ方語ハ太ニ異ナル所アリテ外人ニハ甚タ解シ難キモノアリト聞キ　余元ヨリ之ニ加フルニ地理ヲ知ラサルノ不便アレハ機会ヲ待テ英人カ若クハ日本人ニテ英語ヲヨク話スル人ト同行セント欲セリ　八月二十三日余鎌倉ニ至ル　稲瀬縄氏ニ出会ス　氏云フ吾蘇山行ノ企アリ今夕又ハ明朝当府ヲ発セント欲スト　余云フ余モ亦此企アリ　請フ余ノ為ニ両日発途ヲ遅延スルヿヲ得ハ余ハ子ト同行スルヿヲ得ント　氏云フ之レ余ノ欲フ所也ト雖モ今君ト同行スルヿアタス　其所以ハ他日語ルヘシト　余其意ヲ解スルヿ能ハサリシ　氏モ云フ公使館参事官岡部長職氏モ此企アリ　君同氏ニ立ヨリナハ氏モ喜ンテ同行スヘシト　余其好意ヲ謝シ公使館ニ至ル　岡部氏ニ面シ余意ヲ告ク　氏云フ大ニヨシ　余モ亦二ノ同行ヲ欲スル所也ト　茲ニ於テ忽チ決シ旅行ノ順序等ヲ議シ

銀座 伊東屋製
No. 74 10×20

二十四日夜同府ヲ発スルコトニ決ス

二十五日イーストン、チクリーノ寓ヲ辞シ出テ、公使館ニ至ル　此日加藤照麿独乙ヨリ帰朝ノ途次ニ来英セシニ遇ヒ又佐方潜造ノ来遊セシニ遇フ　此夜河瀬公使ノ晩餐ノ饗ヲ受ケ辞メ岡部氏トキングス、クロス停車場ニ至リ八時三十分同所ヲ発ス　此列車ハ英国ニ有名ノ急速ナルモノニテ又倫敦エヂンバラ間ヲ往復スルモノ也　夜間月清ク天ニカヽリ車窓ヨリ望メハ鬱葱タル森林ノ眼前ニ横ハルアリ瞬間ニ之ヲ過レハ又漠々タル平野ニ出テ之ヲ過クレハ又深邃ノ山谷ニ入ル　千変万化皆唯一瞬間ニアリ　蓋シ一時間六十乃至七十英里ヲ馳スルモノ也ト云フ　夜半岡部氏ト談話シ寝ニ就ク

二十六日朝六時エヂンバラニ達ス　先ツ「ホテル、ロヤル」ニ投ス　此時恰好稲葉氏ニ会ス　同氏ハ余等ニ先ツ一日倫敦ヲ発シスカバラニ一日ヲ費シ同地ヨリ昨夜我列車ニテ来リシ也ト

ニ、三人同遊ヲ討ル 稲氏云フ蜂須賀某
ナル者嘗テ余ト同行ヲ欲セシカ一男子伴リ單
身行クコヲ敢テセサルヤトハゲマシタルニ某
奮テ独行セリ 余諸君ト同行ノ快ナルヲ知ル
ト多其ニ対ス慙ル所アリ 故ニ之ヲ辞ス 然
レモ古地ニ於テハ諸所ヲ両君ト共ニ一見セシ
コトヲ望ムト 余等其言ヲ固テ笑テ之ヲ諾ス
小憩シテ後スコツトノ紀念碑ヲ見ル 碑ハ高サ
数十丈ノ高塔ノ下ニアリテ故皇婿ノ紀念碑ノ
ハイドパークニアルモノヨリ壮厳ナルカ如シ
両碑共ニ有志ノ醵金ニヨル 一介ノ詩人能
ク一王族ニマサルノ望ヲウル 又文学社会ノ
一大快事ナルヘシ 新市ト古市トノ間谷ヲ為
ス 二、三ノ公園ヲ設ケタリ 美麗云ハン方ナ
レ 之ヨリ古市ヲ望メハ有名ノ古城山角ニ位
シテ絶壁ノ上ニ立ツアリ 山水ノ妙景ニ富ム
ニ非ス 又其風致ノ愛スヘキモノアルハ唯ニ
史乗ニ有名ナルニ非スシテ古城ノ位置新市公
園ヨリ望テ其宜シキヲ得タルニヨルト云フヘシ
公園ヲ一週シ古市ニ出テフリーチャーチ、コ

銀座 伊東屋製

618 写

レージレナル大学ノ一部ヲ見シ

銀座 伊東屋製
No. 74 10×20

伊東屋製

No. 74 20…20…400